

2019年 か ぜ ひ か

# 風光れ

人権のたより 第9号 1月10日発行

三重県立津東高等学校



『万葉集』で大伴家持が詠った歌があります。  
あらた 新しき し よごと 年の始めの 初春の けふ降る雪の いや重け吉言

(巻20-4516番) 【通釈】 新たな一年の始まりの初春の今日、

この降りしきる雪のように、つぎつぎと重なれ、良いことがいっぱいありますように。

なのに悲しいやるせない記事を読売新聞で見ました。

名古屋市中区で昨年7月に開かれたクラシックコンサートで、ある女性が会場入り口で男性スタッフに車いすに乗せられ、購入した後列中央の席ではなく最後列の端に案内されたのです。何度も抗議したのに聞き入れられず、仕方なく端の席で鑑賞したといいます。女性(78)は全盲で白杖(はくじょう)を使っていたので、スタッフの肘につかまれば座席まで歩けたと主張。購入した席から離れた端の席に無理やり移動せられ、精神的苦痛を受けたとして、市とCBCテレビ(名古屋市中区)を相手取り、訴訟を名古屋地裁に起こしました。

市とCBCは昨年11月の3者協議で女性に謝罪しましたが、女性は「協議の中で、私が納得して席に座ったと言われたことに憤りを感じる」と話しました。一方、CBCは転倒防止などのための対応だったとしたうえで、「話し合いによる解決に努めてきたが、訴訟になり残念」としています。

男性スタッフの真心がもっと深くこの女性の心に届く配慮となってほしかったです。

◎ここでヘレン・ケラーの名言を載せます。

ひとつの幸せのドアが開じるとき、もうひとつのドアが開く。しかし、よく私たちは閉じたドアばかりに目を奪われ、開いたドアに気付かない。

人々の思いやりがあれば、小さな善意を大きな貢献にかえることができます。

盲目であることは、悲しいことです。けれど、目が見えるのに見ようとしないのは、もっと悲しいことです。

ヘレン・ケラーと日本に関するエピソード。

1934年にヘレン・ケラーが来日した際、彼女の財布が何者かによって盗まれてしまいました。そのことが新聞で報じられると、全国からお詫びの手紙や弁償金が次々と送られてきたのです。結果的に、送られた弁償金は盗まれた金額の10倍以上にも及び、そのことに感激したヘレンは、貰ったお金を全て寄付しました。当時の日本は決して豊かな国ではなかったが、困った人に対する思いやりの心は 今と同じか、それ以上であったということで、感動します。

心がほんわかほんわかしてくれとうれしいです。